

【所長室便り】

帯刀益夫

前回の所長室だよりのあと、国立大学の法人化については急速な展開があり、平成14年3月26日に、文部科学省調査検討会議の最終報告「新しい「国立大学法人」像について」が出されました。今回まとめられた最終報告は、「全体として、国立大学法人法による法人化、国を設置者、経費負担者とする、大学と法人一体の組織、教学経営が統一された運営方式、大学業務の特性を尊重した中期目標、中期計画、外部意見を入れた学長選考制度、さらには基本的に国の経費で教育研究等を行う開かれた自主、自立の責任組織」となっており、国立大学におおむね適合的な法人像となっている一方で、職員の身分を非公務員型とすること、財務会計制度の財政的基盤を確保する方式や運営費交付金の積算、配分方式が依然不明であること等、まだ多くの検討課題を残している点もあります。また、大学附置研究所についていえば、この報告ではほとんど触れられておらず、とくに運営費交付金の算定根拠が学生数を中心とする等、附置研究所には不利な要素が多く、また、国立共同利用機関の研究所の法人化をどのようにするかが決まっておらず、現在学術審議会では議論が進められており、附置研究所のあり方も含めて、7月ごろに答申が出されることになっております。一大学一法人の枠内に入るとは思われるものの、その骨格作りがまだ不明確なところがありますので、今後の検討の推移を見ながら対応してゆくことが必要であります。さて、国立大学法人についての最終報告に対しては、国立大学協会として「この最終報告が、全体として、21世紀の国際的な競争環境下における国立大学の進むべき方向の制度設計として同意できるものとし、この最終報告を基に法人化の準備に入ることを決定する」との国立大学協会会長談話を発表し、今後の具体的対応を進めてゆくこととしております。

そして、東北大学でも、平成16年度の大学法人化にむけて、これまでの検討状況をさらに早急に進めるため、東北大学制度検討委員会を設置し、2つの委員会を隔週ごとに開催し、東北大学としての法人化の具体化策を検討しているところです。私と、この4月から新評議員となられた福田教授が、それぞれの委員としてこの会議に参加すると共に、加齢医学研究所としては、組織運営ワーキンググループが中心となり、法人化関連の諸問題の検討を行っております。これまでもこのワーキンググループで各課題についてその都度議論をしてきて頂いており、とくに、教員の任期制についてはかなり突っ込んだ検討を進めていただいております。皆さんの理解が得られる形で今後の方向を具体化してゆかねばなりません。これらの作業とともに、当面、法人化で最も重要な「中期目標」、「中期計画」の策定を7月頃までに進めるため、急遽その作業を始めたところです。この「中期目標」、「中期計画」は、法人化が始まってから6年間毎の組織運営の方針として重要なものであり、その計画の遂行がなされているかどうかの「評価」を受け、この評価にもとずいた運営費交付金を受けることになるというものです。このことは、単なる6年間の「中期目標」と言うだけで無く、

研究所の将来構想，計画の中でとらえることが重要となります。これまで，将来構想ワーキンググループを中心に検討を進め，研究所の改組再編を含む概算要求を行ってきているところですが，今後の法人化を考慮すると，部局独自の考え方だけでなく，大学全体構想の中での位置付けがますます重要となってきました。このような中で，薬学，歯学研究科，加齢研が協力し，医学系研究科に附属の「創成医学応用研究センター」が平成 14 年度概算で認められ，最近，第一回の運営委員会が開催され，その具体的な実現に向けて取り組みが開始されております。また，平成 15 年度概算要求で，医学部附属病院と歯学部附属病院が統合して東北大学病院（仮称）となる計画が進められており，ライフサイエンス全体の教育研究体制の星陵地区将来計画を策定する必要が強まっております。この点で，医学，歯学，薬学等の研究科，あるいは生命科学研究科とともに，加齢研も協力して将来像を考えてゆく必要があり，将来構想ワーキンググループ等を中心に検討を進めていただけるものと思います。

最近の東北大学の大きな動きの一つとして，キャンパス移転計画があります。これまで，青葉山ゴルフ場跡地への移転という方針で進めてきた計画でしたが，ゴルフ場問題の裁判の長期化も考慮に入れ，一方で，片平地区，雨宮地区の建物の放置できない老朽化問題，また片平地区の売却益から移転費用に当てるという採算性がバブル期以後では対応できないことなど諸般の状況を考慮に入れると，ゴルフ場跡地への移転という基本方針は変更せず，市民の理解を得つつさらに強力な推進体制を執るとともに，とくに片平地区の東北大学の一部利用も考慮に入れたキャンパス計画を考える必要が出てきました。市民からも，片平地区を学園地域として残し，東北大学が利用してほしいと希望する意見も多く，一部の片平地区を東北大学が使用する計画を練り，現在このような方針変更を含めて新たなキャンパス計画の策定が進められているところであります。星陵地区のキャンパス計画を考える場合も，大学全体のキャンパス計画を考慮に入れて将来像を考える必要があるでしょう。

さて，昨年度から改修工事が続いておりました研究所附属病院棟が，星陵地区のプロジェクト総合研究棟として完成し，現在，医学，歯学が使用する 4，5 階を除いて，移転する加齢研の臨床系 4 分野などが移転を進めているところです。また，移転して空いた研究棟のスペースには，移転後すぐに医学系研究科の基礎棟の改修工事のため，一部医学系研究科の講座が移転し，約一年間使用することになっております。しばらく慌ただしい状況が続くこととなりますが，皆さんの御協力のもとになんとか対応したいと思います。その後，可能なら研究棟の改修をしたいと考え，来年度の概算要求を進めております。最近の設備の要求では，これまでの設置基準面積の考えだけで無く，協同的に利用できるスペースを確保することが義務付けられており，流動的に管理運営する方式が必要となってきたことも御理解を願いたいと思います。また，今後，ますます基盤的経費は減少し，競争的資金に基づく運営を迫られることとなりますので，それに向けた検討も必要です。

このように最近の大学の動きを述べて参りますと，研究，教育，診療など本来の我々の課題を忘れてしまいそうな状況ですが，もともとこうした活動は，大学の良い研究教育の環境を作るためのものであり，その本質を忘れないよう

にしないでないと肝に命じ取り組んでおりますが、研究所がより発展するよう、皆様の一層の御理解と御協力をお願いいたします。

ところで、昨年、加齢研の研究会と同窓会は組織の再編を行い、研究会同窓会としてスタートしましたが、今年度は、新たな試みとして、研究会同窓会の講演会を開催することに致しました。来る 6 月 29 日（土）には、加齢研の集談会、総会に引き続き、サイエンスフィクションの作家として著名な瀬名秀明氏をお招きし、「小説と科学の新しい関係」と題する講演会を企画しております。その後、改修なった新プロジェクト総合研究棟内の会議室での同窓会懇親会を開催致しますので、諸先輩の方々も多数ご参加下さり、現在の研究所の若い研究者とも交流を深めて下さる様お願い致します。